

## ■「ちくま評論入門」解説——読解問題への過程

### 4 武満徹「未知へ向けての信号」

参考『武満徹著作集全五巻』【760/T/76-1】～【5】、『時間の園丁』【760/T/75】（北野高校図書館）

#### ■目標

●随筆的な文章の論理を追跡する。（追跡するなかで、事例とのつながりや話題の転換に気づき、停止し、見渡す、という練習）

#### ■追跡

① 此頃になって、ここ信州の山も、やっと夏らしい表情を取り戻したようにみえる。普段なら、避暑地とはいえ、日中はかなりの暑さだが、今年は、七月半ばに、まるで冬のような冷たい氷雨が降り、気温も十三、四度程に上がらないような日が、幾日か、あった。気象観測衛星が天候の様子を仔細に分析して、予報はかなり正確になったとはいいながら、だがそれも余り当てにはならなかった。

◆問いの感知。「未知へ向けての信号」というタイトルから、「予報が当てにならないかった」という例が関係していると勘づこう。議論がどつちを向いて進むか予測することが情報処理を的確にし、速める。

② 科学は物質やエネルギーを究め、新しい情報科学のエポックを迎えたにもかかわらず、人間にとつての未知は、まだ量りしれないほどに大きい。人間の手が及ばぬもの、人間が制御しえないものがまだ多く残されてあることに、だが、ほっとした思いもする。

未知が残っていることに、ほっとする。書き手の示す方向がうっすら見えてきた。

③ 風が起り、霧がはれて、山が忽然と青黒い姿を顕すと、はたしてそれはこれまでもずっとそこに在ったのだろうか、新たな驚きにとらえられる。そんな時に、私は、自分のなかで、音楽へ向かって、なにかが動きはじめるのを感じる。こうした感興は、かならずしもなにかの対立が生み出す劇的情動といったものではないだろう。自然界には、目に立つ激しい変化もあれば、目には見えないが変化し続ける状態というものがある。私は、その中で、どちらかといえば、目に見えないものに目を聞き、それを聴こうとする人間かもしれない。

前の段落とどうつながっているのか、すぐにはわからない。雨が上がり、信州の山が見えてきた経緯を元にこの文章を書いているのはわかる。——追っかけていこう。

見えなかった山が見える。これに驚く、というのは、筆者独特の感性かもしれない。「当

然じやん」となにも心動かさない人も多いだろう。作曲家である武満徹は、そんな（目立たない）変化に刺激され、音楽の創作へ向かうスイッチが入る。「見えにくい変化に目や耳を向ける人間」という自己認識。

④ 人間の認識というものは、一様ではなく、多次元に亘っている。したがって私が感じとつたものが、それが直ちに、同様に、他人のものとはなりえないだろうと思っている。だが、私は、ひとりではない。私は生きているが、また同時に、生かされてもいるのだ。何に、また誰によって？

「私が感じとつたものが、それが直ちに、同様に、他人のものとはなりえない」。これは、自他が隔てられているという意識。独創を追う性向のある人は、特にこれを強く感じるだろう。だが、同時に、私は何かⅡだれかによって、生かされている。そう感じる。感じとつたものは、閉じられたまま、自分の中で終わっていくのではない。そういう思いが、私はひとりではないという思い、そして、音楽を作るといふ動機につながっていく。

⑤ 私の音楽は、たぶん、その未知へ向けて発する信号のようなものだ。そして、さらに、私は想像もし、信じるのだが、私の信号が他の信号と出合いそれによって起きる物理的変調が、二つのものをそれ本来とは異なる新しい響き（調和）に変えるであろうことを。そしてそれはまた休むことなく動き続け、変化し続けるものであることを。したがって私の音楽は楽譜の上に完結するものではない。Ⅰむしろそれを拒む意志だ。

何を言っているのだろうか。作曲という場面から推定しよう。「その未知Ⅱ未だ知らないもの」とは、直前、「何に、また誰によつて？」を受けるだろう。誰かわからないけれど、私を生かしてくれている人（もの？）。比喩の意味するところはさておき、「私の音楽Ⅱ信号」という等式は立つ。

私が発信するもの（音楽？）が、他から発信されるもの（なんだろう？）と出合い、ぶつかったり、なんやらかんやら絡み合ったりして、変化して、前と違う新しい調和のとれたものになっていく。……ってことを、わたしや信じてる。武満さん、信じてるんだな。しかもそれは一回だけじゃなくて、何度もまた変化して、変化して、変化して——どこまで変化するんやろか。「私の音楽は楽譜の上に完結するものではない」——やっぱし音楽のことなんやね。楽譜に書いて、はいおしまい、ではない。そりやそうでしょ。といったくなるが、まあ、それを見てだれかが演奏して、そのときにいろんな解釈もあって、上手に引いてくれたり、（へたくそだったり）、聞くほうもいろいろで、きのうの聞き手はああ聞いたけど、きょうの聞き手はこう聞いて、時代が変わればまたお互いに発信受信のぶつかり方がまた違ってきて——という感じなのかな。よくわからんけど。

読解問題1 「むしろそれを拒む意志だ」とはどのようなことか。

「それ」＝私の音楽が楽譜の上に完結すること、だから、「私は、私の音楽が楽譜の上に完結することを拒む意志を持っている」わけですね。「完結しないで！」って願ってる。じゃどうなればいいのか？

「私の信号＝音楽が他の人と出合い、新しい響きに変わり、変化し続けること」を信じてる。完結しない／変化し続ける、というセットでまとめるといい。

（解答例）「筆者は」自分の音楽が楽譜に書いたとおり完結するのではなく、自分の音楽が他の人たちと出合い続けることで、新しい響きに変化し続けることを信じている、ということ。（74字）

⑥ だがこれは西洋の芸術志向とはかなり違ったものであるように思う。西洋音楽に深い憧憬をもって接し、それを究めようと作曲を生業としてきた者としては、随分大きな矛盾を抱えてしまったことになる。だがいまやそれは、安直に溶解できるようなものではない。果てしなく大きく膨れ続けている。

自分の音楽についての考えは、西洋での音楽についての考えと大きく異なる。西洋音楽を懂れているのに、自分の考え方が西洋音楽の考え方と異なるというのは大きな矛盾だ。でも、この矛盾は、なくなるどころか、大きくなり続けている。——どーなるんだ！

「完結しないで！」と異なるというのだから、西洋では「完結しろよ」って考えるのか。おれの書いたとおり、完結しろよ。えらそうですね。「わからんやつはわからんでいい！」みたいな。

●「停止と見渡し」ここで、いったん停止せよ。「未知のもの」へ向けて、〈未完結〉なまま投げ出す、それでもだれかがキャッチして育ててくれるという、筆者の信じる方向と、「わかってる相手」に〈完結〉したパッケージをドンと「どうだ！」と押し出す「西洋の芸術志向」との違いが鮮明になってきた。

⑦ もしかしたら日本の（東洋の）作曲家は、誰しも、そうした矛盾を内面に抱えているのではないだろうかと考えるのだが、それしも断定はできない。私は日本を代表する作曲家でもなければ「日本」の作曲家でもない。日本に生まれ、育ち、この土地の文化の影響を多く蒙っていることを充分に自覚しながら、そして、それが不可能であることを知りつつも、そうした枠から自由でありたいと思っている。

みんなも自分の考え方が西洋音楽の考え方と異なるって思ってるんじゃないの。知らんけど。とにかく自分は、日本文化の影響を受けているけど、その日本文化の影響から自由でいたい。むりかもしらんけど。——西洋的じゃないのがいいのか、日本的じゃないのがせいいいのか、どっちなんですか？ 武満さん。ここには武満さんの迷いのようなものと願いが混じりあっている。迷ってるんだな、と、はつきりつかむ。

⑧ 「日本」の（西洋音楽）作曲家という特殊性で見られることが最近随分少なくなってきたが、それ

でも2国外では、未だに、そうした居心地悪い思いをすることがある。人間の理解の幅は、こんな時代になっても一向に広がらず、深まっていけないように感じられるが、変化の兆しが無いわけではない。情報科学の進化は、量的なものから質的なものへ向かって変化しているのは疑いようもない事実だし、異なる文化はグローバル文化へ早急に統合されるような心配すらみせはじめている。だがそれは、これもまた矛盾するようだが、かならずしも簡単に実現されるべきものではないだろう。安易な統合が生まだすものは一体どんなものだろうか？ 起こりえないだろうこと解りながらも、単純にならされた均質の文化など、考えるだに恐ろしい。

日本人の顔してるのに、西洋音楽やっつて変わるって変わってるねー。これはあれかな、黒人や白人が雅楽の演奏してるみたいな感じなのか。その文化のものは、その土地の人がやれっていう感覚。でも、グローバル化が、そういう文化の垣根を取り払いつつある。でもでも、垣根がなくなっちゃって文化は一つ、つてのものなあ。武満さん、垣根、要る？ 要らない？ どっち？ ここにも、迷いがちらちら。

**読解問題2**「国外では、未だに、そうした居心地悪い思いをすることがある」とはどのようなことか。

「そうした居心地悪い思い」＝「日本」の（西洋音楽）作曲家という特殊性で見られること」。この等式を踏まえて、ことばを補い、居心地の悪さ、を別の言葉で表現する。そのとき、ここに前の段落の「自分は、（日本文化の影響を受けているけど、）その日本文化の影響から自由でいたい」という筆者の思いをふまえること。自分の思いと外からの見られ方との食い違いにふれることが必須。

（解答例）「自分は、日本文化の影響から自由な立場で西洋音楽に取り組みたいと思ってるやつてきたのに、外国では、今でも、西洋とは異なった文化である日本文化の影響を受けているはずの人間としてしか見られず、どこかよ者扱いされているように感じるといこと。（116字）」

⑨ 私たち日本の（西洋音楽）作曲家が、自分のものとは異なる伝統文化に育った西洋近代音楽を学び実践していること（西洋人とは異なる）有利は、3他者の眼で私たちが生まれ育った地域の文化を、その内から、見ることが出来るということではないだろうか。その文化は、国家というような制度や観念とは無縁で、自由な（地球上の）一地域の、確固として生き、また変化し続けるものとして把握されなければならないはずのものが——。そして、ほんとうの（国際間での）相互理解は、そこからしか始まらないのではないだろうか。

実感を持って理解したい。逆に、自分の生まれ育った地域の伝統文化を、そのまま受け継いで実践している場合を想像してみよう。日本人が和歌やっつてるとかさ。地元のお祭りやるとか。そのときは、「他者の目」で見る、という度合いは減る。なんだかわからんけ

ど、これが伝統なんだよとかいって、無条件で礼賛したりするかもしれない。えらそうになるかもしれない。矛盾はないし、誇りみたいなものも感じるし、ちよつとほかの文化を低く見たりするかもしれない。ぴったりきてるがゆえに自文化を絶対視する落とし穴があるかもしれない。

日本人なのに西洋の音楽を作曲する人間は、自分のものとは異なる伝統文化のなかで発達してきた西洋の音楽を学び、実践する。そのとき「他者の眼で自分たちが生まれ育った地域の文化を、その内から、見ることが出来る」。これは、「自分のものとは異なる伝統文化」のまなざしで見るとのことだ。日本人じゃないまなざしで、日本文化（自分たちが生まれ育った地域の文化）を見る。しかし、西洋人なら、日本文化を外から見ることしかできないし、日本日本した人（ってどんな人か）は、ただ閉じた形で感じるだけだが、（からだは日本、まなざしは西洋人）のひとは、内側から見つつ、同時に解放されている。「日本文化の影響から自由でいたい」という思いが働くからだ。そして、それは「有利」だと筆者は言う。なぜ？

**読解問題3** 「他者の眼で私たちが生まれ育った地域の文化を、その内から、見ることが出来る」ことを、どのような点で筆者は「有利」だと考えているのか。

筆者は文化をどのように捉えるべきだと考えているのかな。

「その文化（＝自分たちが生まれ育った地域の文化）は、国家というような制度や観念とは無縁で、自由な（地球上の）一地域の、確固として生き、また変化し続けるものとして把握されなければならない。」

国家とは制度であり観念だっというて。そして、本来文化は、そんな制度や観念（国という幻想）とは関係なく、自由なもの、ある地域に確かに生き続け、固定的ではなく、変化し続けるもの。国家と切り離されて自由に生き続ける文化という見方は、「ほんとうの国際間での＝国家にこだわらない相互理解」をはぐくんていく。

国家にこだわらない相互理解。国家にこだわらない＝自由。自分たちが生まれ育った地域の文化を絶対視しないまなざし。それは、異なる伝統文化を学ぶことによって得られたものなのだ。

「自分たちが生まれ育った地域の文化を」こういうふうには捉えれば、こんないいことがある、という形で書く。

（解答例）「自分たちが生まれ育った地域の文化を絶対視せず、国家という制度や観念とは無縁な、地球上の一つの地域の文化として捉えることによって、国家にこだわらない自由な相互理解につながる点。（87字）」

⑩ それにしても「人間」がそれぞれに自立した自由な人間になるためには、殆ど無限の時間が必要だろう。矛盾を抱え、打ちひしがれそうになりながら、なお私が音楽を止めないでいるのは、その無限の時間を拓く園丁のひとりでありたいという希望を捨てきれずにいるからだ。

⑪ 山に動じ、とりとめない感慨に耽っていると、たちまちに時間は過ぎ、山は再び雲に蔽われて、視

界から消えた。

「人間」がそれぞれに自立した自由な人間になる」。ほんとうはそれが近代の理想だが、現実には、特に現在、なんと〈国家〉が醜くしゃりやり出てくることか。改めて確認しておくが、「人間」がそれぞれに自立した自由な人間になる」ために、人間は社会を構成する。〈国家〉は、その社会を有効に運営する形態の一つである。国家より先に人間があるという認識が、近代の根底を支えているし、それは近代に合意されたものであるだけで、いつの時代にも変わることはない真理である。

武満さんにはある種の絶望が感じられる。しかし彼は希望を捨てない。園丁というのは、庭の手入れをする人だが、ここには種が芽を吹き、育つのを手助けするイメージが重ねられている。音楽が自由な人間を作る、という考え方は、じつは、あの孔子が説いたこととまったく同じである。

「孔子が齊の国に滞在したとき、韶（しょう）の音楽を聞きいて感動し、三ヶ月間肉の味がわからないほどでした。そして、『音楽がこの様な高みに達しようとは想像もしなかった』とおっしゃいました。」（『論語』）

#### ■読解問題

- 1 「むしろそれを拒む意志だ」とはどのようなことか。
- 2 「国外では、未だに、そうした居心地悪い思いをすることがある」とはどのようなことか。
- 3 「他者の眼で私たちが生まれ育った地域の文化を、その内から、見ることが出来る」ことを、筆者はどのような点で「有利」だと考えているのか。

#### ■発展問題

武満さんのいつていることのなかから、よく理解できたり、共感したり、逆に質問が思いついたりした箇所を抜き出し、どういう点で理解／共感／問いを感じたのか、書きなさい。取り上げるのは一箇所でよい。

（ヒント）たとえば、音楽をやっている人。あなたは、あなたの演奏や歌をどのように発信していますか、改めて振り返ってみて。また、あなたはどのように音楽（やその他のアート）を受信していますか。アートはあなたを自由にしてますか？

●重要語「グローバル」＝地球的な。globe は、地球。球を意味する。ということとは、私たちの星が閉じた球体だという認識にもとづく語ということだ。地球、という日本語もそうやね。陸地と海でつながった一つの世界。▼かつては国際的＝インターナショナルという語がよく使われたが、これはナショナル（国）とナショナル（国）の間、という意味だから、国家が前提となった語。国家という〈細胞〉がまずあって、その間を往来する感じ。対してグローバルの場合は、〈細胞膜〉はもう破れていて、自由に、人・金・モノ・情報が行き来しているイメージだ。ネットは物理的な距離をほとんどゼロにしてしまったね。